

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

甲賀寺 雑考

畑中英二

1. はじめに

甲賀寺とは、『続日本紀』天平年間に甲賀宮（紫香樂宮）とほぼ同時に現れ、廬舎那仏造像が発願されたところでもあり、現在史跡紫香樂宮跡として指定されている寺院址がそれにあたると考えられているものである（図1 甲賀寺推定地周辺位置図を参照）。ただし、現時点においては数々の先行研究があるものの、甲賀寺の位置付けは一筋縄ではいかない点がある。というのも、文献史料から推測する限りにおいて甲賀寺は、天平勝宝3年(751)には「甲賀宮国分寺」つまり近江国分寺になっていると考えられていることから、近江国分寺が甲賀寺のそれをどの程度踏襲していたかは明らかではなく、史跡紫香樂宮跡を甲賀寺と呼称するものの現在見られる姿そのものは近江国分寺のそれなのである。とはいえ、

文献史料にみえる甲賀寺を考古学的に考える際には、発掘調査を行わない限り、信楽に所在する近江国分寺を明らかにすることからはじめるしか手段はないのだ。

本年、宮町遺跡において朝堂院の一面と目される遺構の検出があり、甲賀宮の所在地論争にほぼ終止符が打たれ、新宮神社遺跡においても甲賀寺と甲賀宮とを結んだと考えられる道路遺構及び橋脚遺構の検出があり、甲賀宮及び甲賀寺に関する調査研究は新たな局面を迎えたといえる。更には今後、第二名神高速道路建設などの事業に伴って緊急調査が実施され、その情報が増大することは容易に推測できる。そこで、遺跡間の関係を的確に把握する必要性が生じている。近江国分寺の伽藍配置についても同様に、従来の平板測量図（図2 甲賀寺伽藍配置図を参照）

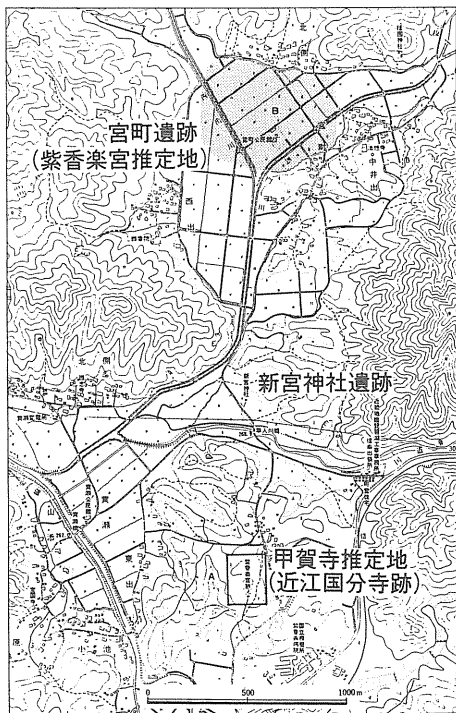


図1 甲賀寺推定地周辺位置図

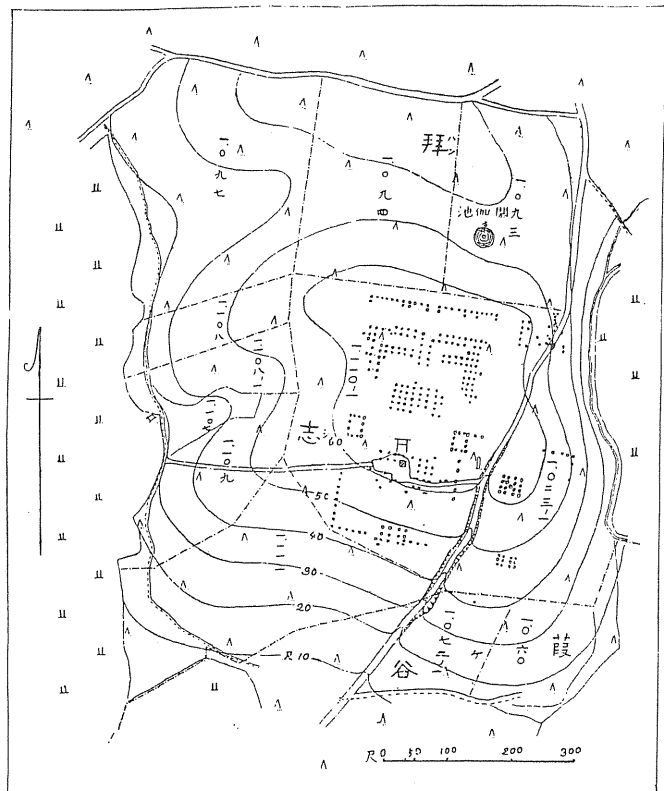


図2 甲賀寺伽藍配置図（肥後1931より）

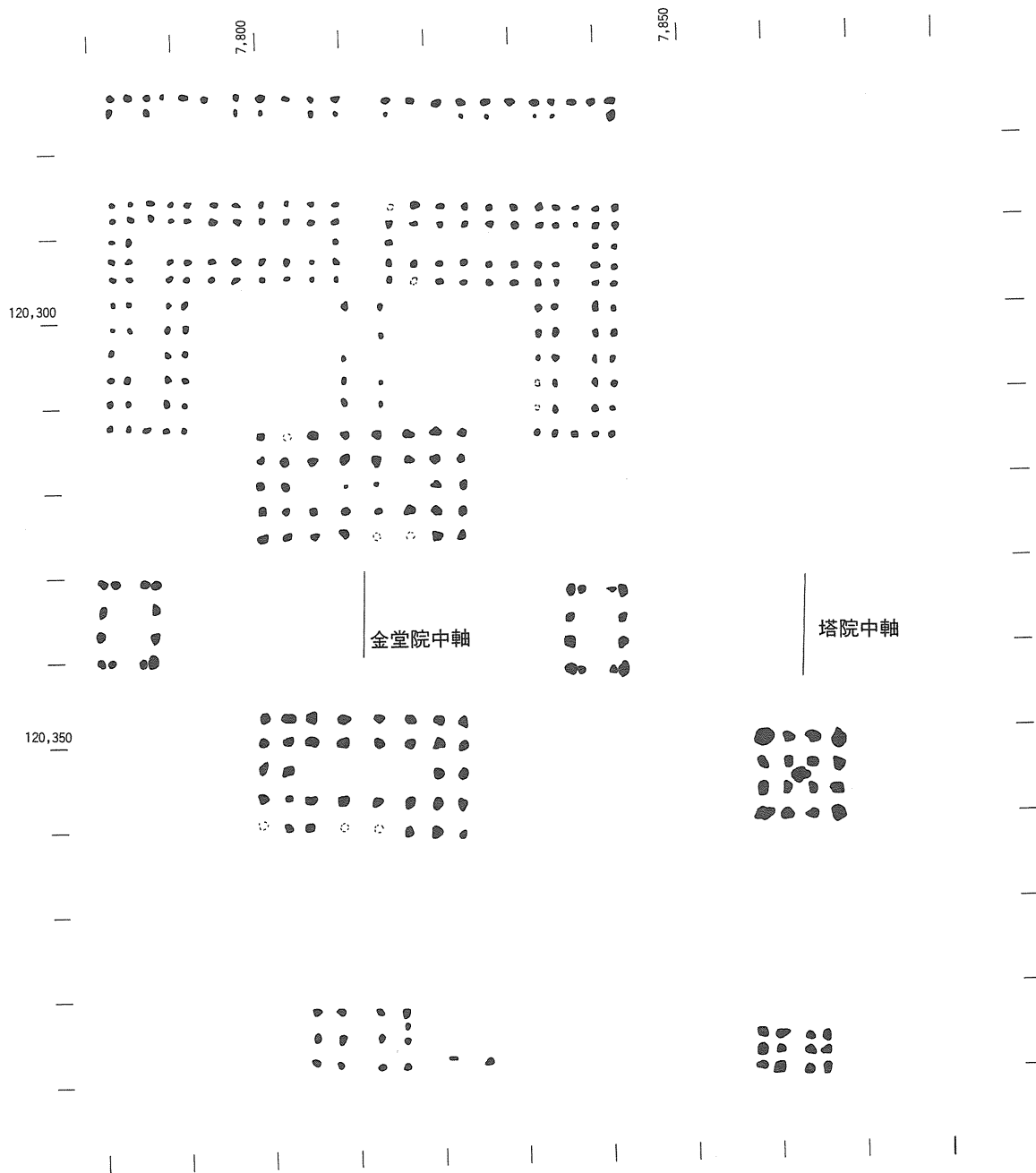


図3 近江国分寺伽藍配置図

によるものではなく、広域的に位置関係を把握することの出来る国土座標上に各建物遺構の位置を落とす必要が生じてきた。

そこで、本稿では国土座標上に落とした近江国分寺の測量図の提示及び、甲賀寺の位置付けについても研究史の問題点についてふれることとしたい。なお、ここでは便宜上史跡紫香楽宮跡の寺院址を近江国分寺と呼称する。

2. 近江国分寺の伽藍配置について

(1) 測量調査の方法と概要

近江国分寺は、金堂、講堂、塔、鐘楼、経楼、僧坊等からなり、所謂東大寺式の伽藍配置をとるとされている。肥後和男氏の調査(肥後1931)が昭和5年(1930)に実施されたが、その内容を基本的に踏襲した昭和38年(1963)から5ヶ年かけた維持保存復旧工事に伴う水野正好氏の調査(水野1968)が知られている。ただし、肥後氏の調査においては伽藍配置を明

らかにすることを主眼としたため、礎石の位置の確認が主で、出土遺物に関するデータは殆ど無い。水野氏の調査においても、整備に主眼が置かれたために、肥後氏の調査の際に検出された礎石の位置の再確認が主な内容となっている。

今回は、当然のことながら現状で確認できる礎石の位置を国土座標上に落とすことを目的としているため、既知の情報以上のものを引き出すことは出来ていない。また、各建物遺構の礎石については、肥後氏の調査の時点で既に原位置から移動してしまっているものがあり、その点については水野氏の調査の際にも再認識されている。更に、原位置を移動したそれらの礎石は「置き直し」されていることが明らかであるので、一部の(多くの)礎石の位置が本来のものではないことを予め明らかにしておきたい。

測量の方法としては、肥後氏及び水野氏による報告書の記載に従って、原位置を留めていると判断できる礎石の3～4箇所に国土座標を直接落とし、水野氏の報告に記載されている各建物遺構の平面(復

元)図と齟齬がないかを確認した。その結果、原位置を留めていると判断できる礎石については、基本的に図面を踏襲できると判断した。ただし、厳密な位置関係については問題は残る。

(2) 伽藍配置及び主軸方位について

以上の測量の結果、個々の建物遺構の構造については水野氏による復元図を踏襲しても問題は無いものの、建物遺構間の位置関係を修正する必要性が生じた。その点については、図示しているものを参照されたい(図3 近江国分寺伽藍配置図を参照)。

まず、伽藍主軸についてみてみよう。測量の結果、金堂院はN1.5°E、塔院についてはN2°Eをとることが明らかとなった。ただし、金堂の中心点から金堂院の伽藍主軸に対して90°東に振ると、塔心礎の中心点に至ることから、金堂院と塔院の設計上の共通性を見出すことは出来よう。金堂院が甲賀寺の位置する大丘野の最頂部にあり、塔院がそこから谷部を挟んだ支脈上にあることから、自然地形に影響された結果、金堂院と塔院の主軸をやや違えることに

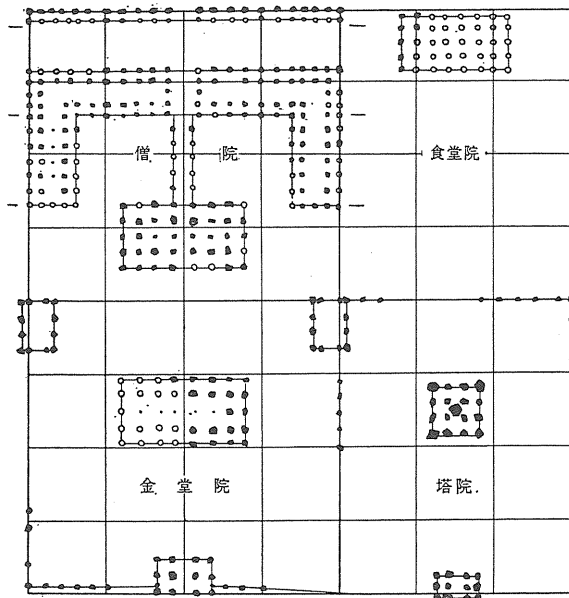


図4 水野氏割付け案

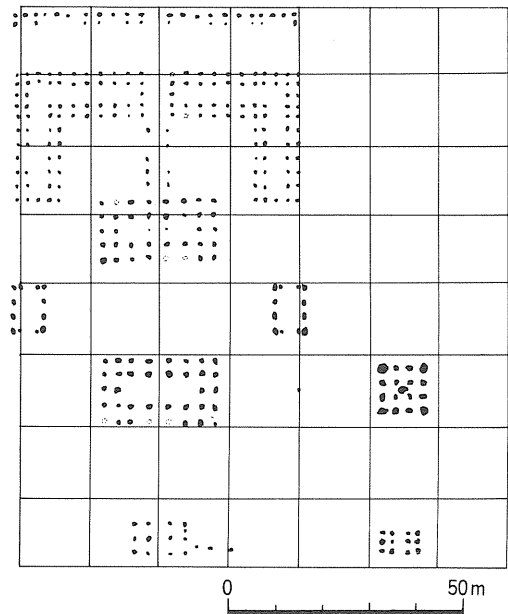


図5 修正割付け案

なった可能性を想定したい。また、僧院はほぼ真北方向をとることから、南北方向に並ぶ金堂院と僧院はそれぞれに主軸方位を違えていることも判る。この点については測量精度の問題もあるが、両者に若干の時期差があった可能性を想定する必要もあると思われる。

次いで、伽藍の割付けについてみてみよう。水野氏の報告には1尺=30.3cmとし、東西50尺、南北47.5尺の方格で、南北に8区画、東西に7区画があったものとされる(図4 水野氏割付け案を参照)が、個々の建物の位置関係が変更を余儀なくされたため内容そのものが変更される(図5 修正割付け案を参照)。1尺=29.8cmとし、水野氏の割り付け案に従うと、東西50尺単位が7区画となるが、南北を8区画に使用すると47.8尺単位となる。素直に東西南北50尺方格で割付けた場合、金堂中心を割付けのセンターにすると、塔心礎の中心が東に175尺に位置にくる。また、金堂院中門と塔院中門も同じく東西に175尺の関係にある。金堂中心から南に100尺の地点には金堂院回廊北端礎石、東西に100尺の地点には金堂院回廊の外側にあたる東西端礎石があたる。金堂中心と講堂中心及び僧坊中心はほぼ同一線上に乗り東西50尺の割付けにおさまるが、金堂中心と講堂中心間は約33.7m(113尺)を測り、金堂院と僧院の南北の割付けに課題を残す。

また、僧院西端が割付からはみ出してしまう点については、復元図に問題があるかもしれないので、真位置を確認した上で再検討する必要があるだろう。

(3) 今後の課題

甲賀寺の中での主軸方位の振れについては、同様に施工誤差によるものであるのか、施工時期差を示すものであるのかについては現時点では明らかにし得ないが、究明すべき問題である。また、現状での礎石位置が真位置を留めていない可能性が高く、更には基壇等の遺構の崩壊が進んでいることから、地下遺構の状況確認は急務であると考えられる。そのことによって、現状では明らかにしえない伽藍の区画も明らかになるだろう。

近江国分寺と甲賀宮(紫香楽宮)推定地である宮町遺跡とは、ほぼ南北に一直線に位置している。ただし、先に見たように近江国分寺の建物主軸は北を指

向するもののやや東に振るものが多いが、宮町遺跡で検出されている奈良時代の遺構は北を指向するもののやや西に振るものを主体とする。同様に、近江国分寺と宮町遺跡のほぼ中間地点にあたる新宮神社遺跡においても奈良時代の遺構は北を指向しながらもやや西に振るものを主体とする。宮町遺跡の奈良時代の遺構についてはほぼ確実に天平14~17年(742~745)頃を中心とするものであり、新宮神社遺跡の奈良時代の遺構についても旧河道より出土した土器の年代観(8世紀中頃)、天平16年の紀年銘木簡、年輪年代測定から744年5月頃に伐採された建築部材、743年に伐採された木製品断片から、概ね同様の時期とみて大過無い。一方、近江国分寺については、天平勝宝3年(751)には「甲賀宮国分寺」とあり、その頃には伽藍が概ね整備されていたと考えておきたいところであるが、伽藍の整備が何処まで遡るかは明らかではない。近江国分寺の中での主軸の振れと、近江国分寺と宮町遺跡及び新宮神社遺跡との間の主軸方位についての数度の振れが何に起因するものであるかを明らかにしていく必要がある。

3. 甲賀寺造営プロセスの問題

ここでは、甲賀寺の造営プロセスについて文献史料と考古資料の双方の現状での問題点について簡単にふれ、現状で考え得るものについて推測を試みたい。

(1) 造営プロセスの概略

造営プロセスについて具体的に記しているものはさほど多いとは言えないが、ここでは文献史料に見られる造営プロセスの概略についてふれてみよう。

天平15年(743)10月15日に紫香楽にて出された廬舎那仏造像の発願以降、同月16日の東海・東山・北陸三道の調庸を紫香楽に貢せしむという記事から、紫香楽における宮の造営は大いに進捗したとみられ、同月19日には紫香楽にて寺地を開いている。これが甲賀寺の寺地を示すものと考えるのが一般的である。また、寺地を開くと同時に、行基の勧進も開始している。

翌天平16年(744)11月13日には廬舎那仏の体骨柱が建てられ、聖武天皇もその場に臨席している。この時点で、鑄造仏の骨組みが出来上がったこととな

る。

翌天平17年(745)5月の平城遷都後程なく後の東大寺にて廬舎那仏の造営が開始されるが、甲賀寺の造営は中断してしまったのではなく継続していたようである。同年10月には造甲賀寺所から167人分の公糧の申請がみられる他、天平19年(747)1月19日には甲賀寺造仏所にて製作中の本尊と思われる三尊仏を金光明寺造仏官あてに移送する旨を記した文書が残されている。平城遷都及び東大寺に於ける廬舎那仏の造営開始、本尊と思われる三尊仏の移送という事態を迎えて、甲賀寺の当初の性格は変容したものとみられる。

天平勝宝3年(751)には「甲賀宮国分寺」という名称が出てくることから、この頃には近江国分寺となったと推測できる。

ただし、天平宝字6年(762)の石山寺創建に関する正倉院文書の中に信楽故京の遺材を以って石山に法備国師を入れ奉るべき板屋を造る旨がみえており、国師が一国の寺務を検校するために派遣され国分寺に止住することを常例としていることを勘案すると、国分寺は760年台には信楽から移動してしまったのかもしれない。

因みに、延暦4年(785)に国分寺焼亡の記事が見え、その後近江国分寺は弘仁11年(820)に至って石山の定額国昌寺へと移されたようである。ただ、この時点で焼亡したのが「甲賀宮国分寺」であったか否かについては明らかにする術はないが、信楽の近江国分寺からは平安時代のもものとみられる瓦が出土しており、その頃までは法灯を守っていたと思われる。

(2) 伽藍造営のプロセスについて

以上のように、文献史料からみた造営プロセスは、造仏に関するものが大半を占め、建築物そのものに関するものは天平15年の寺地を開くという記事に尽きる。ただし、想像の域を出ることはないが、天平勝宝3年の「甲賀宮国分寺」の頃には寺院の体裁は概ね整っていたと考えておきたい。なお、先にふれたように宮町遺跡と新宮神社遺跡の遺構主軸が北を指向しながらも西へ振るものであるのに対して、近江国分寺の伽藍主軸は北を指向しながらも東に振るものであることは、両者の施工時期の差を示唆して

いる可能性はある。

造営プロセスを考える際に、文献史料から窺えるものは殆ど無いが、考古資料をみることにより伽藍がどの様に整備されていたかを想定することが出来そうである。ここで、対象とする考古資料は瓦である。甲賀寺の瓦は、上述の様に本格的な発掘調査が実施されていないことにより、量的に乏しいことや出土地点が明らかではないことに制約があるが、甲賀寺の創建期の瓦に山城国分寺所用瓦と同範のものがみられる。中でも、甲賀寺と同範であると考えられている瓦は、天平18年9月29日に恭仁宮大極殿が施入された後のものであると考えられているのである(中谷・上原・大槻1979)。ただし、瓦の同範関係は概ね確認されているものの、範傷の進行状況の確認はなされていないので、両者の前後関係については明らかではない。これらを確認することによって、結果如何によっては甲賀寺の造営プロセスを明らかにすることが可能となる。この点については稿を改めて論じることとしたい。

現状で見られる甲賀寺は最終的に近江国分寺の体裁をとっていたものであるがとみられるが、甲賀寺の伽藍を何処まで踏襲していたかを推し量る術は現状では無い。この点については、発掘調査によってのみ明らかにされる問題であろう。

(3) 造像のプロセスについて

造像については、考古資料が無いことから、文献史料を再度見ることにしよう。なお、史料に乏しいことから、かなり大胆な推測を行うことになるが可能性の一つとして提示してみたい。

直接的な証拠にはなり難いが、大仏師國中連公麻呂の動きに注目すると興味深いものがある。以下に簡単にみてみよう。『統紀』の公麻呂の卒伝によると、“当時の鑄工が敢えて手を下し得なかったものに、彼の功恩によって聖武天皇発願の大仏が遂に完成した”とあるところや、晩年には造東大寺司次官になっていることから、造像の総監督の能力を持っていたと考えることが出来る。ただし、「東大寺要録」にある「大仏殿碑文」には大仏師と大鑄師は分けて書かれていることから、彼本来の職能としては、仏像の原型を作る塑像製作にあり、それに秀でていたと考えることが出来るのとする(前田1986)。そこ

で、紫香楽における造像の動きについて再度みてみよう。天平16年11月13日に廬舎那仏の体骨柱が建てられた後、半年足らず経った翌天平17年4月25日に公麻呂が突如として正七位下から従五位下になっている。大和金光明寺に於ける廬舎那仏の造像は未だ計画段階前の出来事であるとし、公麻呂が当時甲賀寺の造仏師であると仮定すれば、甲賀寺の廬舎那仏造像に係る論功行賞であろうと推測できる。つまり、天平17年4月迄には甲賀寺の廬舎那仏塑像は完成していた可能性を想定できる。

天平17年4月迄に塑像が完成をみた想定した甲賀寺の廬舎那仏は、その後どのような経過を辿ったのだろうか。推測を続けよう。この点については、天平19年1月29日の甲賀寺造仏所から金光明寺造仏官にあてた三尊仏移送の文書が関連する可能性がある。この文書をみると、のべ60人掛かりで担う中尊があり、光背に18体の飛天と13体の化仏があり、脇侍の菩薩像2体はあるものの光背は未完成であったこと等がうかがわれる。この三尊仏は、規模的にみても本尊として作られたものの可能性を想定することができ、天平16年11月に体骨柱の建てられた廬舎那仏そのものであった可能性があるのだ(柴田1991)。この三尊仏が廬舎那仏であった可能性を示唆する状況証拠が一つある。一般的に国分寺には釈迦三尊が安置されたと考えられており、延暦4年に焼亡した近江国分寺にも釈迦三尊が本尊として安置されていたようである。一方、釈迦三尊を本尊としないのは東大寺のみである。東大寺廬舎那仏蓮華台座に示されるように、廬舎那仏を主仏とし釈迦仏をその分身ないし化身とする世界観が、廬舎那仏を本尊とする東大寺と釈迦仏を国毎の国分寺との関係に表現されていると考えられている(前沢1999)。以上の点を踏まえると、こういった世界観が形成されていくなかで、平城遷都後に甲賀寺が近江国分寺となったにもかかわらず廬舎那仏を本尊としていることに不都合が生じてきたことによって、移送を余儀なくされたと考えることは出来ないだろうか。

ともあれ、造像のプロセスについてみてみよう。天平16年11月の体骨立柱の後、翌17年4月までに塑像が完成していたとすると、同年4月以降翌18年にかけての約2年弱で鑄造及び細部の製作等にあたり、

天平19年正月には脇侍の光背を残してその他は完成したとみても、さほど不自然さはない。ここで想定した造像プロセスからは、甲賀寺の廬舎那仏が東大寺のそれよりもかなり小さかったことになるが、「丈六」の座像、つまり約2.5m以上のものであれば「大仏」であることから、東大寺の廬舎那仏並に丈六の十倍の大きさでなければならぬ必然性はなく、そもそも「大仏」とは記されていないのである。やはり、のべ60人掛かりで担うことの出来る程度の大きさであったと考えることは出来ないだろうか。因みに「体骨柱」を建てるという記述から、とてつもなく大きな仏像を想定しがちであるが、東大寺における廬舎那仏造像の際には「体骨柱」を建てたとする記述はない。管見に及ぶ限り、他にも体骨立柱についてわざわざ記したものは無いのである。聖武天皇が立柱式に立ち会ったことが着目される事柄であって、体骨柱を建てること自体は大型の仏像を作る際にはさして珍しいことでは無かったのではないだろうか。

(4) ここでのまとめ

以上に、甲賀寺の伽藍及び造像のプロセスについて推測した。文献史料による解釈にはやや制約があるものの、考古学的調査においては山城国分寺との関わりの中で年代観を確定していける側面があることと、発掘調査によって遺構の在り方を検討することから現在見えている寺院址である近江国分寺が甲賀寺を何処まで踏襲していたか等についての知見を得ることが出来るだろう。その中で、甲賀寺の廬舎那仏がどのような大きさであったかを推測する手掛かりを得ることが出来るものと考えている。

4. おわりに

多くの先行研究のある甲賀寺について、“現在の状況下で出来ること”として、遺構間の関係や主軸方位を明らかにすべく測量を行った。その結果、北を指向しながらも主軸を東に振る近江国分寺と、西に振る宮町遺跡と新宮神社遺跡の関係を検討する必要が生じた。また、近江国分寺の伽藍配置そのものについては、大きく評価を変更する必要はないが、回廊などの取り付きについては、現状で確認できない要素が大きいことから、発掘調査によってのみ明

らかにされるものと思われる。

さして大きな進展はみられなかったが、本稿が甲賀寺—甲賀宮をはじめとする当該地域に関する研究、また、当該期に関する研究の一助となれば幸いである。

本稿をなすにあたり、森郁夫(帝塚山大学)、林博通(滋賀県立大学)両先生からは多大なる御教示を頂き、現地の測量調査にあたって諸々の便宜をはかって頂いた鈴木良章、高橋加奈子(ともに信楽町教育委員会)両氏、測量調査に御協力頂いた山西敬子、林修平、山本信也、大槻恭子、松本美幸、榊村麻貴、北川美紀氏をはじめとして、以下に御芳名を記す方々からの御指導・御協力を得ました。文末ではありますが、謝意を表します。

相原嘉之(明日香村教育委員会)、神保忠宏・辻川哲朗(財団法人滋賀県文化財保護協会)

(はたなか えいじ：企画調査課主任技師)

参考文献

- 滋賀県教育委員会1967「史跡紫香楽宮跡・塔跡・關伽池発掘調査概要」『教育時報』19巻特集号 大津柴田 実1991「近江」『新修 国分寺の研究』第三巻 吉川弘文館 東京
- 中谷雅治・上原真人・大槻真純1979「恭仁京跡昭和五十三年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 京都
- 林 博通1989「甲賀寺跡」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 大津
- 肥後和男1931「紫香楽宮趾の研究」『滋賀県史蹟調査報告4』大津
- 前沢和之1999「鎮護国家の寺」『古代を考える 古代寺院』吉川弘文館 東京
- 前田泰次1986「廬舎那仏鑄造」『新修 国分寺の研究』第一巻 吉川弘文館 東京
- 水野正好1968『史跡紫香楽宮跡保存施設事業報告書』滋賀県教育委員会 大津

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思えます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668